

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲改修前の「高見の惣井戸」西側から。平成20年代。



▲取り付けられた案内板 東側フェンス(令和5年5月)。



▲改修された「高見の惣井戸」南側から。



▲「高見の惣井戸」全景(高見の里3丁目) 西側から。

高見に伝わる甘露な清水井
空海生誕一二五〇年に設置

高見神社が北宮の池(高見の里三丁目)に接して鎮座しています。神社前の道を東に行くと、すぐ国の登録有形文化財の田中家住宅が見られます。明治時代初期の豪農住宅です。

その田中家住宅の南門に面する道の南西側に石造の井戸がフェンスに囲まれ、保存されています。古くから「弘法大師空海の惣井戸」として知られています。惣井戸とは、共同井戸をいいます。「歴史ウォーク」77号で紹介しましたので、ご存知の方もおられるでしょう。史跡巡りで訪れる方も多く、私は以前から案内板の必要性を感じていました。

そうした折、今春、高見町会の役員さんから、フェンスや内扉が痛み、井戸を覆うアルミ板も破損して危険なので、補修する旨の連絡をいただきました。そこで、この機会をとらえ、町会のご協力を得て、由来を示す案内板を建てることにしたのです。

五月「松原の歴史を知る会」や「松原木工クラブ」の会員さんらによって、木製板が取り付けられました。空海は平安時代前期、高野山(和歌山県)を開き、真言宗を興しました。のち、空海を慕い、心の拠りどころを求める大師信仰が広まり、本市でも、空海が高見に立ち寄り、井戸を掘ったという伝説が生まれたのです。

空海がこの地の井戸で水を飲むと、ひどい悪水でした。しかし、再び錫杖で地面を突くと、甘露な清水が湧き出したということです。

今見られる井戸は、江戸時代後期の天保八年(一八三七)に高見村の信田善右衛門が父の釋浄恵の十三回忌にあわせて造立したものです。井桁は整形された花崗岩で、凸形の四枚を交互に組み合わせ、北面と東面に銘を刻んでいます。

令和三年四月のことですが、真言宗智山派(総本山・京都市東山区智積院)に所属する智山伝法院(東京都港区)で常勤教授をつとめられる田村宗英さんが松原を訪ねられました。同派が発行する教化誌『生きる力 SHINCON』の取材で、「弘法大師空海の惣井戸」伝承を取り上げてくださるからです。

四月二十一日、田村さんは東京からお越しになられ、私が案内させていただきました。当日の午前中は、岡五丁目の空海を祀る大師堂で行なわれていた恒例の「護摩木奉納」の縁日に足を運ばれました。そして午後から、高見の里の惣井戸に向かわれたのです。田村さんは、同誌に「お大師さまとご信仰ー全国の大師信仰を訪ねてー」を連載されています。二回にわたって、本市のこれらの大師信仰を紹介されたのです(令和三年十二月「第一〇七号」、令和四年三月「第一〇八号」)。

た町会長など、地元の人々の声も取り上げられています。次に、文面を引用させていただきます。

「近所の方によると、この地域の水は金気が多いが、この井戸の水は金気がなく重宝していたこと、また、奈良・大峯山に登る山上参りの一週間前から禊をするが、その時はこの井戸の水を使用していただ話してくださいました。現在は水道が整い利用されなくなりましたが、静かに水を湛え、大切に残されていました」

同文から、高見の人々にとって、井戸は空海が掘ったと伝える大師信仰に連なると共に、身を清め、禊をする神聖な水でもあったことがわかります。

本年、令和五年(二〇二三)は、空海生誕一二五〇年にあたります。空海は奈良時代の宝亀五年(七七四)六月十五日、讃岐国(香川県)の現在の善通寺で生まれました。そこで、真言宗各派では、誕生日の六月十五日を中心に、盛大な法会が数か月以上にわたって執り行われています。僧侶による法要だけではなく、公開講座や多くの人々に真言宗の教義である密教に気軽に触れてもらおうと、写経や太鼓の奉納演奏などさまざまなイベントも開催されます。

記念すべきこの年に、高見に伝わる「弘法大師空海の惣井戸」の案内板を設置出来たことは、お大師さまのおかげをいただいた「ありがたさ」に出会った心地なのです。